

「さざなみや志賀の都は荒れにしを昔ながらの山桜かな」(平忠度)

近江の湖を詠んだ和歌にはこころ惹かれるものが多数ありますが、そのなかでも千載和歌集に収められたこの一首は、特に印象深い名歌と思います。この歌に詠みこまれた、波静かな琵琶湖と、それを取り巻く山桜咲く山々は、滋賀の美しい自然を象徴する景観と言えましょう。そのような滋賀県の地形を、地球科学の目からさぐってみましょう。

1. 若く険しい山々

滋賀県を取り巻く山々は、最も高い伊吹山でも1400mに満たない、いわば低山です。しかし滋賀県の山地は、いずれも最近の地質時代(第四紀とよばれる過去258万年間)に急激に隆起してきた、日本でも特に若く、かつ今も活発に隆起し続けている山々です。これらの山地の縁には山を持ち上げる活断層があり、それが動くたびに、ずずず、ずずず、と高くなってきました。しかし、あまりに新しい時代に隆起を始めたため、山頂には隆起を始める前に造られていた平坦な地形(山頂小起伏面)が広く残されています。滋賀県では鈴鹿山脈の鎌ヶ岳のような鋭鋒はごく少数で、比良山地最高峰の武奈ヶ岳や鈴鹿山脈の御池岳など多くの山の稜線に広い山頂小起伏面が分布しています。また、びわ湖バレイ、御在所岳、箱館山といった山頂のスキー場は、みな山頂小起伏面に由来する高原状の地形を利用しています。山頂小起伏面は、滝が連なる急で深く切れ込んだ沢によって、徐々に削られつつあります。その結果、痩せ尾根と深い谷からなる険しい山腹と、山頂に広がる高原状のなだらかな稜線(写真5-1-1)という、滋賀県独特の美しい山地景観が出来上がったのです。

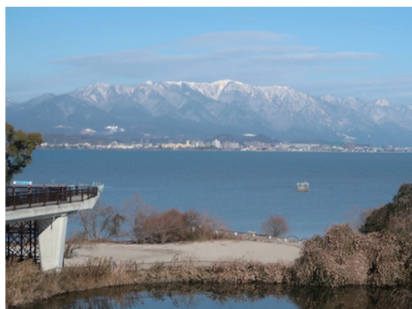


写真5-1-1 琵琶湖東岸からみた比良山地の稜線
撮影：里口保文氏(琵琶湖博物館)

2. なだらかな丘陵と台地

意外と知られていないことですが、滋賀県内の丘陵と台地は琵琶湖より広く、県土全体の約1/4を占めています。丘陵・台地は、目立たない地形ですが、ここには滋賀の大地のでき方を知る上で大変重要な情報が詰まっています。これらは、山が隆起するとともに琵琶湖が沈み込んでいった時代に、その過程を刻みこみつつ堆積していった地層によってつくられています。これらの地層から、私たちははるか昔の自然環境を復元することができるのです。また、これらの地層は、信楽焼など陶磁器の原料となり、豊かな湧き水の水源となるなど、私たちに多くの恵みをもたらしてきました。身近な里山



である丘陵・台地は、自然史のアルバム帳であると同時に、今も人々の生活を潤す自然の贈り物でもあります。

3. 琵琶湖を取り巻く平野

琵琶湖の周囲には、広く「沖積平野」と呼ばれる低地が広がっています。この平野は、周囲の山地や丘陵から削り出された土砂が琵琶湖の周囲に積もってできあがった、平坦な土地です。平野では縄文時代以来多くの人々が生活を営んできました。その結果、滋賀県の平野のほぼ全域で人間による地形改変の跡が認められるようになっています。写真5-1-2は1960年に高島市今津町一帯を上空から撮影した写真ですが、平野の大部分が畛敷のように区画されていることが読み取られるでしょう。これは古代～中世に耕地を区画した「条里制」による地割が現代まで引き継がれていることを示しています。一方で、石田川の兩岸や琵琶湖の湖畔では不規則な地割が目立ちます。これは中世以降に石田川の氾濫によって地割が改変されたり、湖畔の不安定な農地で条里地割が徹底されなかったりしたことを反映していると考えられます。

滋賀県の平野部には、このように自然の営みと人の営みがまじりあって形成された景観が広く見られます。こうした地形の成り立ちからも、自然の息吹や先人たちのはたらきを読み取ることができます。



写真5-1-2 高島市今津町の条里地割
(昭和35年国土地理院撮影の空中写真(国土地理院ホームページ「地理院地図」に収録されているKK604YZ)に追記。)

琵琶湖博物館(特別研究員) 小松原 琢